

ヨハネスブルクサミットに参加して

山之内拓也（鹿児島大学大学院）



私は「ヨハネスブルクサミット提言フォーラム」という組織に属しておりまして、サミットに記者として参加し、特に日本のNPO、NGOの活動取材してきました。

ヨハネスブルクサミットとは、1992年にリオデジャネイロで地球サミットというのがありまして、その10年後を記念して南アフリカのヨハネスブルクで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」と呼ばれるものです。

持続可能な開発とは、地球の持つ能力以上に天然資源を増やすことなく、世界全体の人々の生活を質的に向上させること、を求めるものです。

特にポイントが三つほどあり、一つ目のポイントは、経済成長と公平性と言われていきます。経済システムがグローバル化する中で、置き去りにされる国家やコミュニティといった問題をどう解決していくか、ということです。二つ目は資源の消費を減らして自然の生息地を保全するために解決策を考えていかなければならないこと。三つ目が社会開発ということで、貧困問題を中心にしていきますけれども、仕事がなかったり、食料が不足していたり、教育を受けら

れなかったり、エネルギーの問題や健康管理、水や衛生設備といったものをどのように世界中の人々にまんべんなく行き渡らせるか、といったことを中心に、持続可能な開発について話し合われました。こういったサミットで、環境開発政策の指針となる「実施計画」と各首脳の決意を示した「ヨハネスブルク宣言」を採択して9月4日に閉幕しました。

ヨハネスブルクに入った印象からお話します。ヨハネスブルクというのは南アフリカの経済の中心地になりますが、街中に柵が多いんですね。黒人と白人、貧しい者と富める者を隔てる柵がどこを見てもあります。世界一治安が悪いと言われていまして、もともと市内にあったオフィス街の周辺は、外からの人の流入によりストリートチルドレンや野外生活者・泥棒が増えて、逆にオフィス街全体で引越してしまい、昼間はゴーストタウンと呼ばれています。

白人の居住区は厳重なゲートがあり、プール付きの家などもあるのですが、反面、3～4畳のプレハブ小屋が並ぶ旧黒人居住区もあります。もともとアパルトヘイト（人種

隔離政策)で有名だったのですが、ネルソン・マンデラ氏によってアパルトヘイトが撤廃されました。しかし制度がなくなることにより逆に混乱の時期にあるという気がしてなりません。

そういったところで会議が行われたのですが、結果的には「実施計画」で、安全な水と基本的な衛生施設へアクセスできない人の割合を2015年までに半減させること、2015年までに乱獲などで減少している漁業資源を回復すること、地球温暖化防止のための京都議定書批准促進など具体的な数値目標や行動計画が盛り込まれたことなどが評価される一方で、EU(欧州連合)や日本のNGOなどが主張していた再生可能なエネルギーの導入目標設定が見送られるなど、一部の途上国政府やNGOなどの市民社会からは、「実施計画の内容も抽象的で新味を欠き、実施計画の実効性も懐疑的だ」との評価も聞こえています。

私は、約300人くらいがこのヨハネスブルクサミットに出席した日本のNPOやNGOがどんな活動をしているかを取材してきました。その中からいくつかをご紹介します。

まず、「洗剤・環境科学研究会」がサミットのブース内で南アフリカの小学校との技術交流をはじめた、という事例です。日本から炭酸ガス測定器、NO₂(二酸化窒素)大気汚染パッシブサンプラー、放射能測定器などを持参・展示し、早速小学校の理科の先生が、理科教材として使えるものが南アフリカには僅かしかないので協力・支援して欲しいとの要請がありました。結果的に大気汚染サンプラー50個を渡して9月1日より一ヶ月間、どれだけ町が汚れているか測定した後、日本に送ってもらい結果を知らせることになりました。

もう一つは、10代から30代の日本人青年を中心とした「ユース」(「A SEED JAPAN」「エコ・リーグ」「SAGE」などのメンバー達の総称)というグループです。さまざまなパフォーマンスやアピールを行って、9月2日小泉首相がヨハネスブルクを訪れた際に、5つの提言をまとめた「日本の青年有志による今後10年の活動指針」を携え、「もっとNPO・NGOと仲良くしてください。」と直訴した、という事例です。

三番目は、インドのウィリアム・スタンレー氏がインド、ネパールで植林を中心とした環境再生のプロジェクトを行っている日本のNGOのSOMNEED(事務局:岐阜県高山)と協力して、企業の開発によって住民が立ち退きを迫られる現状を訴えている事例です。

最後に私の感想ですが、それぞれの政府間の交渉だけで働きかけの結果が出ていないのではないかと、あまりよい評価がもたれていないヨハネスブルクサミットなんですけれども、確実に日本のNPO・NGO、さまざまな団体が人と人との人的ネットワークをつくりだしているのではないかと、思います。「持続可能な開発」には、こうすれば確実によくなる、という一点突破論というのはないと思いますが、人と人との地道な人と人との交流こそが最も有効な方法になるのではないかと強く感じました。